

比企谷八幡と愉快的な仲間たち

T・A・P

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『もしも、フィギュアが喋り出したら』

と言う、テーマの元、100%息抜きで書きました

目次

報告	25
再会	13
出逢い	1

## 出逢い

この国には三大義務と言う物がある。

一つは、教育を受けさせる義務。もう一つが、納税の義務。そして最後に勤労の義務だ。

教育を受ける義務ではなく、受けさせる義務。つまるところ子供に対する義務ではなく親に対しての義務だ、子供も居ないましてや結婚なんてしていないし、した事が無い俺には早すぎる義務だ。

早すぎるって言ったが、そもそも将来結婚できるかわからないので俺には未来永劫関係ないのかもしれない。

自分で言っていて悲しくなるな、これは。

もう一つ、納税の義務と仰々しく言っているが簡単に言えば税だ。身近なところで言えば消費税だったり、酒税やたばこ税と言ったところだろう。

俺は酒を飲まないし、煙草も吸わないので身近で関係あるのは消費税だが、結局のところ買物をすれば子供だって税を納めている事になる。

これもいたって普通で取り立ててどうこう言う事じゃない。何か取りた立て騒ぎだところで、政治家のお偉い方々がどうこうする問題であつて、俺達はそれを見ているしかない。

まあ、どうにかしたいと言うんなら、政治家を目指して改革すればいい事だ。俺にはそんな信念とか持ち合わせていないからほとんど人ごとだ。

と、まあ、遠回りをして本題にすぐには入らず喋っているが、俺が言いたい事なんて筒抜けになっているだろう。

話題に出した教育、納税、勤労の三つの内教育と納税の二つの意見を述べたとなれば最後に残るのは勤労だけだ。

勤労の義務、働く意思と能力がある者は働く義務がある。

極端に要約すれば強制的に働かせはしない、働きたいなら働け働きたくないなら働かなくていい、といっているのである。極端にしすぎた気もするがちゃんと本質をとらえていると俺は思っている。

つまり、専業主夫は悪くない！

なんて、言うわけじゃない。非常に言いたいがな。

勤労の義務だとか言ってはいるが、働くと言う事は生きるために一番有名で一番選ばれている手段だ。

働くと言う事はお金を稼ぐ事、生きて行くためにはお金が必要になってくる。でもお金も生きるための手段でしかなく、大切なのはそのお金で購入する物の方だ。

ゆえに義務などがなくても人間が生きていくためには働かなくてはならない。

そう、人は例外を除いて働かなければ生きてはいけない。

何かしらの形でお金を稼がねば生きていけない。今の俺のように専業主婦になれず一つ目の会社を辞めてようやく再就職できた瞬間そう心から感じた。

と言う事は、今の俺に降りかかっている事柄にも人生にもまったくと言って関係ない。これからする物語に関して何の意味も無いただの現実逃避だ。

もろもろあつて退職してから一ヶ月もたたずに再就職先が決まり『うわ、ラッキー』と喜んだ自分が滑稽に見える。

再就職先は『アウターツ』と言うフィギュア専門店の店員だった。

もともと広くない店内にフィギュアを飾るための棚やケースを置いて、ようやく一人が通れるくらいの通路スペースを確保しているくらいのこじんまりとした店だが、意外と品ぞろえが豊富でカウンターの後ろにはこれから出るフィギュアの予約票を張りつけて受け付けてもいる。

店内には置いてあるフィギュアの作品のアニソンが流れていたり、今やっているアニメのオープニング曲やエンディング曲がBGMとして流している。それに加え、カウンター横の棚の上にはテレビが置かれており今期のアニメのオープニングやエンディングの映像を映している。

正直、こう言う客商売系はやりたくないのだが、やらざるを得ない状況と言うのは誰しも訪れる。それでも、生きるためにはやらなければ

ばならない。

「はあ、早まったかなあ」

これは、俺、比企谷八幡と愉快で奇妙な連中との物語だ。

「雇って三日目で完全に丸投げと言うのはいかなものだろうか」

アニソンが流れる店内で椅子に座りカウンターに顎だけをのせだらりと腕を投げ出し、ガラスドアから見える店の前を通り過ぎる車をぼんやりと眺めていた。

店内の掃除が終わり、するべき雑用もこなし来店客も無く暇な時間が過ぎていた。店員が二人なら色々と話せるのだが、あいにくとここにいる人間は俺一人だ。一人で過ごすのは慣れているとはいえ暇に慣れている訳じゃない。まあ、二人いたらいたで俺は何も話せないだろうが。

「その方がボク達としては話し相手できて良いんだけどね」

俺一人しかない店内で、俺以外の声が響いた。

「いやいや、そっちはよくてもこっちは結構な死活問題だからな。

昨日も言ったと思うが接客業なんてこれが初めての事で、内心不安でいっぱいっぽいんだよ。てか、昨日も昨日で来たたら来たで開店する前にすぐに本社の方に戻って、オーナーとマネージャーが丸々一日いたのは初日だけだったし。

二日目に来たのはマネージャーだけだったし。あく不安だ」

就職して知った事は、この店がオーナーの副業だったって事だ。

オーナーとマネージャーは本社で本業、自分は副業であるこの店で店員と言う事だった。店長なんていないし他の店員もいない。完全に一人でやっていかなければいけなかった。まあ、それでも数日間は教育があると思っていたのだが蓋を開けてみればこの通りでだ。

「でもキミはこの状況の方が望ましいと思っっている、とボクは思うんだよ」

「……まあ、その通りではある」

ぼっち中のぼっち、キングオブぼっちを自負する俺である。集団で何かをするより一人の方が気楽だ。こうしてグダグダ言っていたが、

正直なところこの状況は嫌いじゃない。

「お前らの事もあるし、むしろそつちの方が色々都合がよさそうなんだよな」

その事で今日は待ち人もある。

「そうだね、ボクもこの方がいい」

「ずるいよ、二人でばっかり話して」

声ももう一つ増えた。

「キノ、僕ももつと喋りたい」

「そうだね、エルメス。それにここにいる皆が彼ともつと話したがっているんだ、ボクたちだけが独占しちゃ悪いよ」

そう言った途端、店内からまた無数の声が聞こえてきた。

「やっぱり、会社つてのは中に入ってみないとわからないことが多いな」

あいつ、早く来ねえかなあ。

出勤初日と言う事でいつもより早く起き約束の時間よりも少し早めに店につくと、すでにオーナーとマネージャーが開店の準備を始めていた。

一番初めに来るつもりだったがそれは叶わなかったようだ。

「おはよう、ずいぶんと早いじゃないか」

「はい、初日ですから」

「そうか、今日からよろしく頼むぞ」

「はい。よろしく願います」

「あ、今日からこれを着て作業をしてね」

挨拶を済ませた後、マネージャーからエプロンを渡された。

胸のあたりに店名が入った黒いエプロンで、首元の端から二本の紐がついていて腰あたりにその紐を通すためとおぼしき輪がこれまた両端にあった。

「えっと、これをこうして」

俺は紐を真っ直ぐに下ろし、それぞれの端にある輪に通しそのまま紐同士を結んだ。あれ、何か違う気がする。

「そうじゃなくて、後ろでクロスしないよ」

そう言つてマネージャーは俺が結んだ紐をほどき、正しいやり方でまた結び直してくれた。

「ありがとうございます」

「うん、これで次からはちゃんとできるね」

「はい、そうですね」

エプロンをちゃんと着るとまずは店内の掃除をおこない、店中の窓を開けて空気を入れ替える。掃除道具置き場だったり、掃除のやり方だったりを教わり最後にのぼりを出して開店の準備が完了した。

準備が終わり開店時間になったがすぐにお客様が来るはずもなく、ショーケースのガラス汚れを拭いたり、棚に置かれたフィギュアの箱についた埃を一つ一つ丁寧にはらっていく。あと、カウンターにあるノートパソコンでの店内BGMの流し方や、店のブログの書き方のレクチャーを受ける。

開店から二時間ほどしてようやく入口から車が入ってくるのが見え、本日そして自分にとって初めてのお客様が来店した。自分は掃除している手を止め、持っていたフィギュアの箱を棚に戻し急いでカウンターに立った。

車のドアが閉める音が聞こえると、すぐに店内にお客様が入ってきた。

「私が接客しているのを見て参考にしてね」

そう言つて店内を見て回っているお客様にマネージャーが声をかけた。

マネージャーが接客しているのを見学して、言われたように俺はどんなふうに話しかければいいのか見たままのそれを真似するのか、考える事がたくさんあるし憶える事もたくさんある。

お客様は二言三言話して一通り見て回った後、また来ますと言つて帰っていった。

「話しかける時はあんなふうにしても良いし、自分で考えて話しかけてもいいの。臨機応変に変えるのが良いかもね」

「はい」



その後、箱をフィルムで包む方法を教えてもらったり接客をしたりと初めての事ばかりでかなり新鮮だった。

前は工場で働いていたから接客なんてした事が無かったし、バイトもやった事が無いからこういうのも悪くない。レジ打ちも初めての体験で今物凄く楽しいと感じている。仕事で充実した気分になるのは久しぶりだ。

初日はオーナーとマネージャーがいた事もありトラブルも無く閉店となった。窓や扉の施錠を確認し電気を消して初日が終わった。

「はい、これが店の鍵と防犯システムの解除カード」

そう言えば鍵を貰っていなかった事を思い出した。明日から自分では開けられない所だった。

「えっと、この細長いカードはどう使うんですか？」

「ここに防犯システムがあるから入れて読みこませてくれれば防犯が開始されるから」

通用口のすぐ横にある小さなボックスの蓋を開いて中を見せながらの説明。防犯システムの解除も開始も初めての事だ。

「こう、ですね」

見るだけじゃなく実際にやりながら憶えた方がわかりやすい。

例えば『百聞は一見にしかず』と言うことわざはよく知られているが、実はこれに続きがあり『百見は一考にしかず、百考は一行にしかず、百行は一果にしかず』と続く。

説明するといくら聞いても自分で見なきゃわからないし見たとしてもそれがどうなっているか考えないと先はない、そしてどんなに考えても動かなきゃそれまで動いたからには結果を出さなきゃ意味が無い。

つまり、聞くより見る、見るならやれ。と言うところか。

「今日は私がドアの施錠をしちやっただけど、防犯を入れる前にドアにちゃんと鍵がかかっている事を確かめてから入れる事。そうじゃなきゃ警備会社の人が来ちゃうからね」

「わかりました」

これは下手すればおおごとになるな。

「今日はごくろうさま」

「お疲れさまでした」

「ん、ちゃんと施錠は終わったのか」

オーナーは煙草を吸いながら待っていた。

「今日はお疲れさまでした。じゃあ、明日からもよろしく」

「お疲れ様でした」

俺は俺の車で、オーナーとマネージャーは一台の車に乗って帰って行った。

こうして静かで平和な今日が終わり、本当の始まりが目覚めます。なんて言うとはトル漫画のバトルパートの始まりみたいだ。

しかしながら普通に普通な子の日常にバトルやら異世界召喚なんて事が起きるはずもなく明日も生きるために仕事をする。世界が不変であれ可変であれ、そこは変わらない。

お金がなきゃ何も買えないのだから。

## 二日目

今日はオーナーたちより早く着くと防犯装置の設定を外し、鍵を開け誰も居ない店内に入った。

鞆をバックヤードの棚に置き、その後エプロンをつけまずは店内の窓を開け、箒をバックヤードから持ってきて店内を掃除し始めた。掃除の途中で駐車場に入ってくる車が見え、お客様用の出入口から段ボールを抱えたマネージャーが入ってきた。

「おはようございます」

「おはよう。今日はやいね」

「早く目が覚めたものですから。あ、荷物持ちますよ」

「ありがとう。車にまだあるからこれはカウンターの上に置いておいてね」

持っていた段ボールを受け取り、マネージャーは踵を返し車の方に向かって歩いて行った。

段ボールをカウンターに置くと、俺はすぐにマネージャーの所に急いだ。車のトランクに入れられてあつた全ての段ボールを運び終わ

り、俺は掃除を再開しマネージャーは段ボールの中身を取り出ししていく。

掃除を終えた俺は手伝うためにマネージャーのところに向かうと、既に取り出し終わっていた。中身が置かれたカウンターのの上には、UFOキャッチャーでよく見るプライズフィギュアがいくつも置かれていた。

「これ、どうしたんですか？」

「昨日オーナーがとってきたから持ってきたの。今日はこれを包んでもらおうかな」

「あ、はい……あ、いえ、そうではなくてこれ全部取ってきたんですか？」

「オーナーこう言うの得意だからね」

「あ、そうですか……」

得意で済ましたらいけないような気がするが、まあ、いいか。

「あと、こつちのは予約票だから線にそって切ったあとに壁と同じように張っておいてくれるかな」

そう言つてA2くらいの大きさの用紙を切り取り線で八つに区切りその一つ一つにこれから出るフィギュアの詳細が書かれていた紙を三枚渡された。

「こつちに貼られている中で予約期限が切れていたらはがしていいからね」

「わかりました」

「じゃあ、私はこれで戻るけどあととは頼んだよ。」

それと明日から私たちほとんどこつちにこれないから何か用がある時は電話してね。あ、番号はカウンターの裏に貼つてあるから」

「はい、何かあったら電話します」

「買い取りの対応は昨日言った紙に書いてあるから」

そう言つて急ぐようにマネージャーは開店前の店内をあとにした。

「さて、準備に戻るか」

開店時間となったが昨日と同様すぐに客が来るはずもなく、言われ

た通り梱包をすることにした。

数が多くまだ慣れないので最初はもたつき時間がかかっていたが、量が量で最後の方になるともう慣れた手つきですぐ梱包し終えていった。仕事をおぼえる事は良い事なのだろうが、何か釈然としない気持ちになるのはなんでだろう。

「これで全部終わったか。意外に早く片付いたな」

梱包し終えた物は値段を決められるまでバックヤードの棚に置かれ店内に並ぶ日を待つこととなる。全て棚に収めた後、今度は予約用紙の方に取りかかった。

カウンターの裏からカッターマットを取り出し、ペン立てから良く切れる方のカッターをとりだした。そこで定規を取り出すのを忘れていた事に気がつきプラスチック定規を取り出した。

「……違った違った」

プラスチック製じゃなくて使うのは金属製の定規の方だった。金属製の定規を改めて取り出しプラスチック製を元あった場所にした。

「さて、やりますか」

三枚一気にやればすぐに終わるのだがそれをすると暇になるし正確性に欠ける、ゆえに一枚一枚やることにする。

真ん中の切り取り線にそって定規を固定しまずは半分に分けた。その後、余分な外枠を切り取り一枚一枚切りはがした。五分もかからず一枚目が終わり、続いて二枚目に取り掛かり同じく五分もかからなかった。最後の三枚目が終わろうかとした時、人の話し声が聞こえてきた。いつの間にか客が来たのかと思ひ、作業を中断して店内を見渡してみたが誰もいなかった。

「気のせいかな？」

音楽かテレビの音声がそう聞こえたのだろう。

「いや、この台詞を使って気のせいだったシチュエーションなんて見たことないな」

おもに漫画知識だが。

それでも何か違和感を感じたのは確かだ。さて、こんな状況で導き

出される答えはと言うと……

「キミはボクの声が聞こえるのかい？」

近くから明らかに自分に向けられた言葉、そしてその声に聞き覚えがあった。

その声はとある旅人とバイクが主人公のラノベ作品に出てくる、とある旅人の声によく似ていた。いや、似ているというレベルではなくその声そのものだった。

声のする方へと目をむけるとカウンターに置いてあるフィギュアとパソコンがあるだけだった。確かに置いてあるフィギュアはその旅人がバイクにまたがっているフィギュアだが、キャラの声が再生されたりするようなものじゃなかったはずだ。

一度手に持ったから確信が持てるし自信も持てる、てか、そんな機能があるなら気がついていないとおかしい。だったらパソコンから流れてきたのだろうか。いや、パソコンには一切触れていない。

つまり、

「ボクはキノ、旅人だよ。こっちはボクの相棒のエルメス」

「よろしく」

フィギュア自体が喋っていると言う事だ。

この年まで幽霊はともかくとして怪奇事件の一つも遭遇しなかったが、今ようやくこんな物凄い事に巻き込まれている！ それに加えキャラ自体と喋っているなんて、なんて最高なことだ！ いつの間にか二次元に入りこんでしまっているのか！ ここはどこの天国だ！

やべ、テンションが押さえきれない。

「キノ、この人僕らが急に声をかけたから戸惑っているんじゃないの？ もしくはパニックを起こして動けなかったりして」

「そうだねエルメス。それが普通の反応みたいらしいからね」

「いや、悪い、突然のことですいテンションが上がったんだよ」

「キミは驚かないのかい？」

「いや、驚いているぞ。」

だって二次元のキャラと直接話することができるなんて、俺達としては夢みたいな状況なんだからな。しかも、プログラムで組まれた受け

答えじゃないんだぞ、テンションが上がってしかるべきだと声を大にして言おう！

こんな日が来るなんて夢にも思わなかったし、今でも夢の中にいるような気分だ。本当に現実かつねってくれ。いや、まあ、現実だつてちゃんと分かつているがこんな夢が現実を塗り替えるような、夢が現実を侵食するような。自分の妄想が現実化しているような気がしないでもないが、だがそれがいい。

面白ければいい！楽しければいい！

そういや、お前らが喋っていると言う事はもしかして他のフィギュアも喋る事ができるってことじゃないのか？もしかしなくても喋るのか？うわ！何だそれ！めっちゃくちゃテンションが上がるだろ！さすがに箱に入っているのは無理でも飾つてあるのは喋るんだろ？もう、この店もう天国だろ！

「ねえねえ、キノ。この人絶対ヤバイ人だよ」

「エルメス、そんな事言っちゃだめだよ。彼はきつと混乱しているんだ」

「おいそこ、聞こえているぞ」

「あ、こつちに気がついたみたいだよ、キノ」

「ようやく気がついたみたいだね。ボクらの自己紹介はすましたんだ、キミの自己紹介はまだなのかい？」

「ああ、忘れていたぜ。」

俺は比企谷八幡、昨日からこの店の店員として働いている。これからよろしく、キノ」

「そうだね、よろしく」

「キノだけずるいよ」

「ああ、エルメスもよろしく」

「よろしく」

日常の隣には非日常がいつも居座っている。

逆に言えば非日常の隣には日常が常に存在すると言う事だ。そしていくら非日常にいても結局は日常になってしまう。

つまり、何がいいたいのかと言うと。今日、ようやく俺がこれから生活するべき日常が始まったと言う事だけの話である。

？

## 再会

あの後、店内にある全てのフィギュアが喋り出した。

例えば、この店の商品の半分を占めているワンピースのフィギュアであったり、定番と言えるエヴァンゲリオンのフィギュアだったり。流石に、初号機がうなりだした時は心臓が止まるかと思ったが。

しかし、ありとあらゆるキャラが一斉に喋り出した時は、少しばかり聖徳太子が羨ましく思えた。実在したかあやしいらしいが。

でも、なんつーか、楽しいと言える。仕事をしてて、楽しいと思えるなんてのは初めてかもしれない。

しかし、箱に入れられたままのフィギュアも喋っていたのは驚いた。

プライズフィギュアもスケールフィギュアも箱の中からくぐもった声が聞こえてきた。スケールはすでにだいたい組み上がっているからわかるが、プライズ系は箱に入れるために組み立て式になっている事が多い。そんな状態でも喋ることができるとは素直に驚いた。まあ、どちらにしる喋れるから別にいいんだけど。

本日は開店から閉店になるまで客は来ず、一日中楽しく話していた。こう言うと、俺が俺じゃないように思えるな。

こうして一日中こいつらと話していてわかった事だが、こいつらは自分自身がフィギュアである事をまったく理解しておらず、キャラそのものだと思っているやつがほとんどだった。

不思議な事にフィギュア同士だったり自分と同じキャラのフィギュア同士でも相手が偽物じゃなく、本当に実在するように話していた。

例えるなら、この店は全ての物語が集まった世界で、同じキャラでも出典が違えば別人と言う事なのだろうか。

まあ、でも、楽しいからいい。

全ての物語のクロスオーバーなんて夢みたいだからな。

閉店となり店を閉める準備を行っている、全員が俺を引き止めてきた。



正直、ここで暮らしても良いと思っただがさすがにそれは無理だ。腹も減るし布団も風呂も無い、接客業だから身だしなみを整えるように言われている。なにより、一介の店員にすぎない俺はそこまで自由じゃない。

くそ、自営業だったらと思う事この上ない。

最後に戸締りを確認し終えて店内の電気を消すと寂しそうな声が聞こえてきて、また明日来るよ、と声をかけ戸締りを確認して帰宅する。

俺は帰宅すると、とりあえず晩飯の支度をするためにキッチンに立つ。

大学も最初の就職時もまだ実家に住んでいたのだが、会社を止めたのと同時に実家から追い出された。本当なら小町と離れ離れになりたくなかったのだが、あの頃の俺は何をもち狂っていたのか知らないがあっさりと荷物をまとめて、さっさとマンションを決めていた。一人暮らしを始めた数日はひどく後悔していたが、今考えたらこの為に必要な対価だったんだろうな、と納得する俺がいる。

そうこう考えているうちに晩飯を作り終え、空になった胃袋を満たすことに集中するでしょう。

晩飯を食い終わり食器を片づけるとベッドに座り、帰ってすぐ充電機に差したスマホを手に取り数少ない連絡先から一つ選んで電話をかける。すると、待っていたかのようにワンコールでつながった。

『もしもし、久しぶりだね八幡』

「相変わらず出るのが速えな、一二三」

『そりゃ、君からの電らだからね。』

さて、八幡が僕に電話をかけてきたって事は、何か面白いことがあったのかな？』

「ああ、面白くて楽しい状況の渦中にいる」

総武高校を卒業し、雪ノ下と由比ヶ浜の二人とは別の大学に進学した。

あいつら二人は由比ヶ浜の頑張り、と言うか雪ノ下のスパルタで同じ大学に合格することができた。俺はと言うと、始めはあいつらと同

じ大学に進学することになっていたが、まあ、色々あった。具体的にインフルエンザ、とか。

んで、二人とは別の大学に進学した俺は、大学に進学したからと言って変わることなく、ぼっちでぼっちな素敵なキャンパスライフを過ごしていた。

そこで偶然的、いや、必然的に出逢ったのが電話先のこいつだ。

『へえ、それは気になるね。あの八幡が、僕に連絡を取りたくなるような状況と言う物に並々ならない興味が湧いたよ』

「んで、だ。明日の予定は空いてるか？」

俺の言葉に少し黙ると、メモ帳を開く音が微かに聞こえてくる。

『うん、明日は仕事が入ってないし用事もないから暇だよ』

「だったら、これからメールで送る住所に来てくれ」

『分かったよ。じゃあ、また明日。』

うん、このやり取りは懐かしいものがあるね』

「そうだな。んじゃ、明日な」

俺は通話を切り、一息つく。一息ついてメールを送り、

「風呂入るか」

ベッドから立ち上がり、着替えを持って風呂に向かった。

「さて、いただきます」

一人暮らしで何がめんどくさいかと言えば、朝食の準備だと俺は思う。

朝の五分つてのは、通常の一時間に相当する。故に速く起きて飯の準備をするとなると、めんどくさくて仕方がねえ。

と言っても、今の職場は11時開店だから、早起きする必要はないが。てか、俺が今食おうとしているのが朝食かどうか悩むところではあるな。

おそらく朝食を食べる最中、テレビから流れてくるニュースをBG Mにしていた。

どうやら、ここ最近婦女暴行事件が多いらしい。最近熱くなってきたからそれが原因なのだろうか、服装が薄着になるし。

食器を片付け、服を着替え、

「行つてきます」

さて、今日も騒がしくなるな。

相変わらず客が少なく、と言うより昨日と同じでまったく来店がな  
く一〜二時間ほどが過ぎていった。

店中のフィギュアとお喋りをしていたらあつと言う間に過ぎて行  
く時間であり、テンションの持続力が落ち冷静になれる時間であつ  
た。

「雇つて三日目で完全に丸投げと言うのはいかなものだろうか」

アニソンが流れる店内で椅子に座りカウンターに顎だけをのせだ  
らりと腕を投げ出し、ガラスドアから見える店の前を通り過ぎる車を  
ぼんやりと眺めていた。

店内の掃除が終わり、するべき雑用もこなし来店客も無く暇な時間  
が過ぎていた。店員が二人なら色々と話せるのだが、あいにくとここ  
にいる人間は俺一人だ。一人で過ごすのは慣れてるとはいえ暇に  
慣れていく訳じゃない。まあ、二人いたらいたで俺は何も話せないだ  
ろうが。

「その方がボク達としては話し相手ができきて良いんだけどね」

俺一人しかない店内で、俺以外の声が響いた。

「いやいや、そっちはよくてもこっちは結構な死活問題だからな。

昨日も言ったと思うが接客業なんてこれが初めての事で、内心不安  
でいっぱいいっぱいなんだよ。てか、昨日も昨日で来たたら来たで開店  
する前にすぐに本社の方に戻って、オーナーとマネージャーが丸々  
一日いたのは初日だけだったし。

二日目に来たのはマネージャーだけだったし。あく不安だ」

就職して知った事は、この店がオーナーの副業だったって事だ。

オーナーとマネージャーは本社で本業、自分は副業であるこの店で  
店員と言う事だった。店長なんていないし他の店員もいない。完全  
に一人でやっていかなければいけなかった。まあ、それでも数日間  
は教育があると思つていたのだが蓋を開けてみればこの通りでだ。

「でもキミはこの状況の方が望ましいと思っっている、とボクは思うんだよ」

「……まあ、その通りではある」

ぼっち中のぼっち、キングオブぼっちを自負する俺である。集団で何かをするより一人の方が気楽だ。こうしてグダグダ言っていたが、正直なところこの状況は嫌いじゃない。

「お前らの事もあるし、むしろそっちの方が色々都合がよさそうなんだよな」

その事で今日は待ち人もある。

「そうだね、ボクもこの方がいい」

「ずるいよ、二人でばっかり話して」

声がもう一つ増えた。

「キノ、僕ももつと喋りたい」

「そうだね、エルメス。それにここにいる皆が彼ともつと話したがっているんだ、ボクたちだけが独占しちや悪いよ」

そう言った途端、店内からまた無数の声が聞こえてきた。

「やっぱり、会社つてのは中に入ってみないとわからないことが多いな」

あいつ、早く来ねえかなあ。

と、俺は入口に目を戻すと、そこには全身真っ黒な人影が見えた。

噂をすればなんとやら、相変わらずタイミングのいいやつだ。来客を伝えるチャイムが鳴ると、そこには、

「やあ、久しぶり」

「よう、久しぶり」

大学時代毎日のように顔を合わせていた待ち人が入口に立っていた。

七曲一二三、大学時代からまったく変わっていないかった。

相変わらず冬でも夏でも年がら年中喪服の様な真っ黒なスーツに鳥の様な真っ黒のネクタイ、頭には同じく黒く周りにつばのついた全体的に丸い帽子をかぶっている。

店に入ると帽子を脱ぎ、その下は服装でよりいっそう目立つ白髪も

健在だった。

「まったく、その髪は染めないのか？」

「僕が白髪じゃなくなったら、それはもう僕とは言えないからね。それに、何度も髪を染めると髪がすぐに傷ん髪が無くなっちゃういそうで怖いんだよ」

「お前くらいの年じゃまだ心配するには早すぎねえか。大学時代にも言ったがな」

「早すぎて悪い事はないよ。ほら、肌の手入れや受験とかも早い方がいいからね。」

あ、焼き肉の時はちゃんと焼かなきゃいけないよ。夏が間近な最近  
は特に。これも、大学時代から言っているけどね」

「相変わらずだな、一二三」

「八幡こそ、相変わらずだよ」

柔和な笑みを浮かべ入口からカウンターの方に近づいてきた。俺は裏から丸椅子を一脚出してカウンター越しに渡そうとした。

「ほれ、座れよ」

「いいのかな？」

「見ての通り、客はいない。それにバレなきやいいさ。ま、さすがにカウンターの内側には入れられないがな」

「そう言う事なら」

一二三は椅子を受け取り、目の前に座った。

「ああ、もし客が来たら邪魔にならないところに移動してくれ」

「うん、わかっているよ」

ちゃんと座ったのを見て俺も椅子に座りなおした。

「こうやって合うのはいつぶりだったけな」

「大学を卒業してからだから、二〜三年ぶりくらいだと思うけど」

「あくもうそんなに経ってんのか。一年も経ってないような気がしていたんだが」

つまり、卒業してから一度も会っていないことになるな。

「多分、成人式があったからじゃないかな。ほら、八幡と僕じゃ地域が違って会ってないけど会った気がしているんだと思うよ」

「あくそうか、成人式があつたか」

まあ、本当は行きたくなかったが、小町に言われて一応出ることにしたっけな。

「成人式、どうだった？」

「いつも通り、ぼつちですぐ帰ったぜ。んで、そう言う一二三は行ったのか？」

「んく急に仕事が入っちゃったから行けていないかな。それに僕も同じで、行ったとしてもそんなに楽しいものじゃないからね」

「なるほどな」

七曲一二三は大学で俺と出逢うまで友人の一人もいなかったらしい。

それどころか知人の一人もおらず、せいぜい他人どまり。だと言う事を聞いたのは出会ってから一年経ってからだった。つまり、周りにいたのは他人で家族さえいなかったらしい。そしてその時、

『つまり、俺も他人か』

と言つてやると、

『んく知人だね』

と帰つて来たのは懐かしい思い出である。

それから知人から友人になるまでに気になっていた『死神』という呼び名。

こいつが俺以外から、こいつの言葉を借りるなら他人から言われていた呼び名だった。

呼んでいたやつから由来を問い詰めると、一二三の白髪と不気味で不吉で不幸な雰囲気から死神みたいだと言っていた。もう数人に聞くと、一二三の家族が一二三意外謎の死をとげているだとか、小学生のころ一二三に触れた女の子が一家心中したとかそんな話ばかりだった。

正直、聞けるところまで聞いて回ったがほとんど結末が死亡だったり見た目からだと言う話して落ち着いていた。今思えば、この時の俺はアクティブだった。

昔からこんな感じだったらしい。本人から聞いたことはないが、一

二三と小中同じ学校に通っていた奴から聞いた話が正しいなら。

だから俺が友人になった……なんて事はない。

同情で友人になるほど俺は聖人君子じゃない。それに、同情するって事はそいつを自分以下だと言っているようなものだ。

俺は単純に、普通に、一二三が気にいったのだ。

こう、なんと言うか話しが合いそうでこいつと話していると楽しいだろうなと直観的に思った。まあ、声をかけたのは一二三の方からだったが。

つまり、同情がつけている隙はなかったのだ。この事を知った時にはもう友人だったから……いや、知人だったのだから。

「ま、思い出話はこれくらいでいいか。本題に入るぜ」

俺は居住まいを直し、一二三も同じように座り直した。

「そうだね、僕もそれが気になっていたので早く聞きたいよ」

「最初に聞くが、今も幽霊とか妖怪とかを信じているか」

「あの八幡がいう台詞じゃないね。真面目に答えるなら『信じているだよ』」

「なら、この店中のフィギュアと言うフィギュアが喋り出したと言ったら信じるよな」

俺は声のトーンを落としてその言葉を口に出した。

「八幡、その正体を知りたいから僕を呼んだんだね」

「さすがに分かるか」

「そりゃ、そこまで聞いたら分かるよ。大学の時も、その手の話題で分からない事があれば僕に聞いていたじゃないか」

そう、大学時代いろいろな話題の事を話していたが一番盛り上がった話題は怪談話だった。俺も昔からその手の話は好きでいくらか調べた事があり知識はある方だと思っていたが、一二三の知識量には最後まで勝てなかった。靈感があれば校内限定で心霊探偵なんかをやっていたかもしれないけど、俺達には靈感がないらしくあえなく断念となった。材木座？ 知らない名前だな。

「それに、ちよつと店の中が変な感じだったからね」

「へえ……まさか、一二三。お前靈感があつたのか！」

俺は勢いよく立ちあがり、顔を近づけた。

「え〜つと、卒業してからそう言う事があってなんか靈感がついちやっただみたいなんだ」

「く、なぜそんな面白そうな事を言ってくれなかった」

「ば、バタバタしてたからだよ」

俺も連絡とっていなかったからあまり一二三の事は言えないが、それでも少しは連絡くらいは欲しかった。

「ま、それだったらしようがねえか」

と、俺はため息をつき話しが切れると、ちよつとした違和感に気がついた。

「そーいや、こいつらお喋りで勝手に話しかけてくるのに、いつの間にか静かになつてやがる」

俺は手じかなフィギュア数体に話しかけるも、どいつも沈黙を守り一切口を開く様子がない。

「多分、僕が居るせいかも」

「お前が？」

「うん。僕の雰囲気でみんな警戒しているのかもしれないね。」

大丈夫、僕は八幡の友人で君たちに危害を加えるつもりも、どうこうするつもりもないよ」

そう、一二三はいつもの柔らかな笑みをフィギュア達に向けた。

そうするとぼつぼつと話し声が聞こえてきた。それからさつきまでの静寂が嘘のように騒ぎはじめ、俺達は顔を見合わせた。一二三は可笑しそうに笑い、俺は少しあきれた顔をしていただろう。

「うんうん、八幡の言った通りだね」

「俺の言った通りって？」

「本当に楽しくて面白い事になっているって意味だよ」

「あくそうだろう」

「本題に戻るけど、原因が分かったよ」

「さすが。んで、原因は？」

「やっぱり、憑模神って妖怪だよ」



「付喪神って、長い年月が経った物に魂が宿るってやつだろ。いや、さすがにフィギュアも物と言ってもそこまで長い年月が経つほど前からあるわけないだろ。」

「せいぜい長くて五、六年くらい前の物しかないと思うぞ」

「そつちの付喪神じゃないんだ。えつと、書くものあるかな」

俺は一二三にカウンターの下から一枚のメモ帳と、ペンたてからボールペンを渡した。

「咲人が言った付喪神はこつちの付喪神」

「そう言いながらメモに『付喪神』と書いた。」

「それで、僕が言った憑模神はこんな漢字を使う憑模神なんだよ」

「今度はその下に『憑模神』と書いた。」

「憑いて模す神と書いて、憑模神」

「……聞いたことが、ないな」

その言葉に頷きながらボールペンを置いて一二三は憑模神の説明に入った。

「うん、普通ならあまり聞かない妖怪なんだよ。」

こつちの付喪神と混同される事がほとんどで、憑模神は付喪神と同じものとして紹介されている文献ばかりなんだ」

「俺が分かりやすいようにメモの文字を指しながら説明する一二三。」

「えつと、つまり憑模神は付喪神とは別物なんだな」

「うん、そう言うこと。」

具体的に話すと、文献に残っている方の付喪神は色んな物、長く使われてきた道具とか長く生きた生物、それに自然にある木などに靈魂や神が宿るってことなんだ。もつと具体的に言えばから傘お化けだったり化け草履、猫又とかも実は付喪神に含まれるらしいよ。つまり、長い年月を経て魂を宿す物が付喪神なんだ」

「へえ、猫又も憑模神の一種だったのか、知らなかった」

「でも、ここにいるような憑模神は根っこから違うものなんだよ。」

憑模神は物に取り憑かなくても憑模神と呼ぶ妖怪で、まずそこが付喪神と違うところ」

「……ん？どういう事だ」

「そうだね、えつと付喪神は道具に魂が宿るのは話した通りなんだけど、その魂自体だったり道具を付喪神って言わないよね」

メモを裏返し分かりやすく図を交えながらの説明を受けた。

「ああ、道具は道具だし魂は魂だ」

「うん、その二つが合わさってようやく付喪神になるのがこっちの付喪神」

「なるほど」

俺は顎に手御を当てて頷いた。こうやって、大学時代も聞いたなど昔を思い出した。

「そしてこっちの憑模神は取り憑く前から憑模神で、同じように説明するなら道具は道具なんだけど魂の所が憑模神って妖怪なんだ。つまり、こっちの憑模神って言うのは幽霊が憑依するようなものかな。入れ物が喋るか中身が喋るか」

「付喪神が結果なら、憑模神が要因って事か」

「その考えでいいと思うよ」

「ふむ、同じ牛肉を使っているがそれをメインにするかサイドにするかの問題か。つまり、ステーキか肉じゃがかって事だな。いや、カレーでもいいか」

「ん〜あながち間違っていないかな?」

苦笑いを浮かべ、一二三は話を戻した。

「それでまだ違うところがあって、憑模神はどんな物にでも取り憑く訳じゃなく人形やぬいぐるみくらいにしか取り憑けないんだ。

これは憑模神が名前の通り憑いて模す神で、取り憑いた物のキャラを模するのが憑模神と言う妖怪の特性だからなんだよ。だから、模すためのキャラがない物には取り憑く事ができない」

「あく妙に納得した。フィギュアなんてキャラのオンパレードだからな、そりゃ取り憑くわな」

「それでも、声を聞くのには最低限の霊感が必要なんだけど……」

「つまり、ついに俺にも霊感が備わった、ってことじゃないのか?」

「うん、八幡に霊感は無いはずだよ。それでも聞こえるとしたら、多分、土地のおかげかな」

「土地？」

「うん、土地。八幡とこのお店の場所の相性がいいたと思うんだけど、僕の口からは多分としか言えないかな」

「……俺に靈感がないのは」

「確定だよ」

「マジか？」

うなだれる俺にいつもの笑みの「二三、靈感欲しかったな。でも、ここなら話せるということなら、まあ、良いとおこう。」

## 報告

俺には完全に靈感がない事が分かり、今日一番へこんだ。

「八幡に靈感がなくても、このお店の中だったら喋れるんだから大丈夫だよ」

「いや、フオローしているつもりなんだろうが、お前が靈感ないつつたんだからな」

「あれ、そうだっけ」

「忘れんじゃねえよ」

相変わらず大学の頃から変わってないが、こいつとこうして会話するだけで面白い。

「それで、土地で一時的に靈感ついちゃうとその場所意外じゃもう靈感が働かなくなっちゃう事があるから」

「……だから無理なのか」

「うん、だから八幡の靈感はずっと店内限定だね。あ、分かっているとと思うけど八幡以外には、皆の声は聞こえないから」

「まあ、それは分かるが土地なら俺のように相性がいい奴だったら聞こえるんじゃないのか？」

「土地っていうのは早い者勝ちみたいなどころがあるんだよね。どんなに八幡以上に土地と相性が良くても八幡以外には靈感がつかないよ」

「つまりは、椅子取りゲームでたった一つの椅子にすでに座っている状態か」

「うん、その例えであってる。でも、元から靈感がある人なら聞こえたりすることがあるからね」

まあ、それはそうだ。

「それと、憑模神の危険性について話しておかないと」

「……ああ、それは聞いておかないといけないな」

今まで害と言う被害にあっていないと言っても昨日の今日ではあるが、原因が妖怪である。害のない妖怪も居れば、害を振りまく妖怪も居る事は一二三が話していた。

知っていれば害があるかどうか分かるが、ついさつき知ったばかりの聞いたばかりの妖怪の事は分からないのは当たり前だ。

知らないことまで知っているなんて、それは知らないことがないと言う事だ。せいぜい、知らないことを知っている程度でしかない。

「憑模神は……」

「は……」

「……無害だよ」

「……さらつと言えよ！」

ああ、そうだ、こう言う奴だった。

「ほら、やっぱりこう言うのは緊張させた方がいいと思うんだ」

「いや、まあ、それは同意するがやられるのは嫌いなんだよ」

「本当にヤバい時はすぐ言うんだから、危険じゃ無い時はおおめに見て欲しいな」

「はあ。」

んで、こいつらに危険はないんだな。命の危機が隣にいるのだけは勘弁してくれよ」

「大丈夫。憑模神は基本的にキャラを演じるってだけの妖怪なんだから、危ないことなんてないよ。このまま相手をしてあげてくれたら皆喜ぶから特に言う事はないかな」

「なるほどね、ならこのままでいいか」

今も喋っているフィギュアを見渡しながら結果を出した。

「あ、そうそう、憑模神は自分が取り憑いた物のキャラになりきるから本当は自分が憑模神だつてことが分からないから」

「なりきって本来の自分を忘れるってことか」

「うん、でもごくまれに憶えている個体もいるから見つけたらラツキーだよ」

「ラツキーって特に何もないのかよ。あくいいや、まとめると今まで通り楽しめるばいって事だろ」

「その通り。それに何かあったら僕がいるからね、変な事が起きたら電話してよ」

「了解、そんなときはまた頼むさ」

「じゃあ、そろそろ帰るかな」

そう言つて、一二三は立ち上がる。

「ああ、また来いよ」

「たまに来るよ」

そう言つて入口に向かって歩き出した一二三だったが、まだ何か言い残した事があるのか途中で立ち止まった。

「そう言えば八幡、雪乃ちゃんと結衣ちゃんたちに仕事が変わった事伝えた？」

……あ、ヤベ、言つてねえ。

「その顔はまだみたいだね。早めに言つておかないとどうなるかわからないよ」

「ああ、忠告サンキュー。今日、仕事終わつてから連絡入れてみるわ」

「うん、その方がいいよ。じゃあ改めて、またね八幡」

「またな、一二三」

一二三は来た時のように帽子をかぶり、店から出ていった。

「面白い友達ですね」

「ああ、そうだな」

それから店中のフィギュア達がやいのやいの言つて来た。そして、腐女子キャラのフィギュアが物凄く聞きたくないことを言つて来たのは割愛しよう、いや割愛させてください土下座しますから。本当に。

意外に話しこんでいたみたいで、外はいつの間にか外が暗くなつていた。

今日もこの時間まで客は来ず、このまま今日も客が来ないだろう。てか、今まで散々と×系妄想を垂れ流されて聞かされ続け、さらには感想を聞かれて正直SAN値がごっそり持っていかれている。今日はもうこれで閉店し帰宅したい気分だ。泊まる？ 勘弁してくれ。

さて、残りの時間は今日得た知識を整理しよう。

こいつらが喋り出した原因は『憑模神』と言う妖怪だと一二三は語った。

そして『憑模神』と言うのは『付喪神』とは別物で、人形の様な喋ってもおかしくない物にしか取り憑かないだけ。それが『憑模神』の本質で、なぜかと聞かれればそうであるのだから仕方がないと答える。

肉食動物が肉食であるように、草食動物が草食であるように、それが『憑模神』が『憑模神』である生き方なのだろう。

そして『憑模神』はどうやら無害な妖怪の部類に入るらしく、話している間に生命力をとられる事は無いらしい。知らない間に生命力を吸われて、いつの間にか死んでましたじゃ笑い話にもならねえ。絶対「返事がない屍のようだ」とか言われるし、吸った本人達に。ま、どちらにしろ危険がないならそれで良かった。

さて、ここからがもつとも重要な事だ。なぜなら、俺には靈感がないと言う事が確定してしまった！ 今回の事で一番この情報が最大重要事項だ。

なんせこれから先、妖怪はおろか幽霊まで見る事ができないんだから。いや、妖怪は実体化することができる奴もいるらしいから絶対見る事ができないと言えないか。幽霊もチャンネルが合えば靈感がなくとも見えると言うが、なんかチャンネルが合いそうもないんだよなあ。

ゆえにこの店意外でこんな楽しい事に遭遇しそうにない、これが悲劇じゃなかったらなんだって言うんだ。

「カノ、急にへこんだよ」

「そうだね。何か思い出したんだよ、きつと」

「うるせえ、これがへこまずにいられるかよ。」

この先、靈感がつかないって分かって希望が消えたんだ、これでへこまずにいたら俺じゃねえ」

この店限定って事はこの店内だったら面白い事が起こるってことなんだが、必ずしもあつちから来るわけじゃないこつちから行かなければならない事がある。それに、いつまでもこの店の店員ができるわけじゃない。

経営者なら自分の匙加減でどうにでもできるだろうが、自分の様な

雇われの身としてはその匙加減でどうにでもされる。クビと言われたらそれまでだ。

なら常連としてくれればいいのだろうが、それはそれでどこか気まずいだろう。それに、この客の来なき、潰れる可能性も視野に入れなければならぬ。

「まったく、戯言だよな」

まだ働きだしたばかりだ、やめるやめないを考えるのはまだ早い。それより今は自分ができる事をやるまでだな。

さて、やるべき事は雪ノ下達に電話する事か……うわ、いきなりやりたくねえ。

あくすぐに連絡入れておけばよかった。絶対に怒られるわ。やめた事に対してじゃなく、やめた事と再就職をした事を連絡しなかった事に対して。なんて、理不尽だ。

憂鬱だ、これ以上なく憂鬱だ。こんな時は外の空気でも吸ってこよう。

完全に夜の帳がおりており、外に出ると気持ちのいい風が頬を撫で嫌な事を吹き飛ばしてくれそうだった。気のせいだけど。ずっと座りっぱなしだったから体をのぼすにはちようどいい。

「今日も客来なかつたな」

店の前の道路をいくつもの車が行き来するのを眺めながら背筋を伸ばしていた。

「さて、もうひと踏ん張りか」

あともう少しで閉店時間になる喋りながら掃除でもして時間を潰そうかと考えながら店内に戻ろうとした時、入口のすぐ横に一匹の白猫が座っていた。ここら辺はよく野良猫が出るのか？ しかし、近づいても逃げないから飼い猫だろうか。

「おお、いい毛並みしているな。やっぱり飼い猫か？」

白猫は気持ちよさそうにされるがままになっていた。ここまで大人しい猫は初めてだ、カマクラは大人しく撫でさせてくれなかったからなあ。やべ、気持ちよさそうに咽を鳴らしているこれいつまでも撫でちまってやめどきが分からなくなる。つか、雪ノ下がここにいたら



何時間でも撫でていそうだ。

それからやめどきが分からず、かなりの時間撫でていて気がつくあと数分で閉店時間になるところだった。

「名残惜しいが、またいつか撫でさせてもらえるか？」

フィギュアに話しかけるように猫にも話しかけてしまった。

ニャー

言葉が通じたかと思うほどにタイミングよく鳴いた。

「じゃあな」

最後に一撫でして店内に戻った。

閉店と施錠を終えた後に店の入り口を見ると白猫はすでに居なくなっていた。居たらまた撫でたかったのだが仕方がない。明日また居る事を願い車に乗り込んだ。

家に帰り部屋着に着替えた後、米をといで炊飯器にセットしてあとは炊きあがるのを待つだけだ。

その間におかずを準備するか。確か肉と野菜があつたから野菜炒め作るとして、冷凍ホルモンあるから焼き肉のたれを絡めてホルモン丼にするか。と、こうやって現実逃避しているうちに時間が過ぎる。はあ、さつさとかけるか。

『あら、誰かと思えば無報告谷君』

「いや、もはや別人だろ。むしろ、人の名前ですらねえよ」

かけてワンコールで雪ノ下は出た。速過ぎだろ。

『それで、なんの用かしら比企谷君』

「ああ、その様子じゃ知っているみたいだが、前の会社を辞めて別のところで働き始めたって事を言っておきたくてな」

おそらく、雪ノ下が知っているって事は由比ヶ浜も知っているだろう。教えたのは、多分小町つてところか。

『そう、それでどんなところに再就職することができたのかしら？』

「あくちよつとした店の店員だ」

『……あなたに務まるのかしら？』

「うるせえ、そんな事は自分が分かってんだよ。」

つと、これから由比ヶ浜の方にも言わなきゃいけないから、もう切るぜ」

『ちよつと待ちなさい。あなたの働いている店の場所を教えてください』

完全に来る気だな。まあ、教えなかったとしてもどうせ小町が教えるだろうから、結局結果は変わらないだろう。

「わったよ、あとでメールしておく」

『ええ、早めに送りなさいよ』

「へーへー、んじやな」

通話を切ると、続けて別の連絡先に電話をかけた。

『あ、もしもし、ヒツキー！』

「よう、久しぶりだな」

『本当に久しぶりだよもう！ 三人で集まろうって時も、ヒツキーだけ来ないし！』

「あゝ悪かったって」

相変わらずテンションが高いな、こいつは。

『ん、それで、ヒツキーどうしたの？』

ようやく由比ヶ浜は落ち着いたので、これで本題にうつれそうだ。

「ああ、前の仕事を辞めて別の所に再就職した事を報告しようとな」

『え、そうだったの！ 知らなかった！ あ、それゆきのんは知ってるの？』

「ああ、さっき電話したところだ」

てつきり知っているものだと思っただが。

『あ、良かった。それで今度はどんなところ？』

「ちよつとした店の店員だ」

『あ、だったらそのお店の場所教えて！』

「ああ、いいぞ。つと、時間も時間だからもう切るぞ」

『うん、おやすみ』

「ああ」

短く言葉を返し通話を切り、俺はベッドに身体を投げ出した。投げ出してすぐ身体を起こしてメール製作画面を立ち上げた。

「つと、メールしておかないとな」

急いで雪ノ下と由比ヶ浜あてのメールを作成する。文面に店の場所と営業時間を書いてちゃんと正しいか確認した後送信した。送信して再びベッドに寝転がると、腹が鳴った。

「…………さて、飯食うか」